

タイトル	1944 年にアウシュヴィッツ = ビルケナウ強制収容所からスロバキアへ脱走したアルノシュト・ロジンとチェスワフ・モルドヴィッツの歴史 ... エドゥアルド・ニジニャンスキー
著者	木村, 和範; KIMURA, Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集, 70(2): 75-95
発行日	2022-09-30

《翻訳》

1944年にアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所からスロバキアへ脱走したアルノシュト・ロジンと チェスワフ・モルドヴィッツの歴史*

エドゥアルド・ニジニャンスキー**
木村和範*** (訳)

第二次世界大戦中、ナチスの強制収容所にスロバキアからのユダヤ人がいたというようなことがあり得るだろうか。カトリック神父にして、政権を掌握したフリンカ・スロバキア人民党の党首であり、法によって自らを「総統」(スロバキア語の“Vodca”, ドイツ語の“Führer”)と呼んだ大統領ヨゼフ・ティンの率いる国が、自国内のユダヤ人を強制収容所に移送して、放逐したのはなぜであろうか。

イヴァン・カメネツの次の指摘は、正当である。「……ホロコーストは、犠牲者を強制移送列車に乗せるところから始まったのでは

なく、絶滅収容所や強制収容所、そしてガス室のゲートで終わったわけでもない。容赦ない論理によって、収容所で頂点に達した『だけ』である。もちろん、このことは驚くに値しない。絶滅のプロセスはそれよりもっと早くから始まっていたからである。初期のホロコーストは、国家と国民の経済的、社会的、政治的、市民的な優先事項の陰だけでなく、宗教の背後にも隠れていて、おそらくはきわめて『無害』か、あるいは目立たないほどに洗練された形をとっていた。このことについては、ホロコーストにかんする知識が少しでもある研究者はみな、珍しいほど意見が一致している。そのような優先事項を取り扱う分野の中で、政治エリート一人ひとりが負うべき明確な責任が生まれた。スロバキアに当てはめると、ホロコーストは早くも1938年の秋には始まっていて、次第に国内のユダヤ人にはスロバキア国民の公然たる敵という烙印が押されるようになった。そして、[スロバキアが独立した]1939年3月になると、新生国家の危険な敵と見なされるに至った。このプロセスは、『非アーリア系』市民から政治的・経済的・社会的・市民的な諸権利を奪い、最終的には基本的人権をも奪いさる措置を次々と合法化する恐るべき法制度を背景にして展開された。』⁽¹⁾

政権党たるフリンカ・スロバキア人民党に

*“The History of the Escape of Arnošt Rosin and Czeslaw Mordowicz from the Auschwitz - Birkenau Concentration Camp to Slovakia in 1944,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide (Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25-26 August 2015)*, pp.18-38. ジリナにおけるこの研究会の主催団体は International Christian Embassy Jerusalem と Institute of History of Slovak Academy of Sciences であり、研究会の開催と論文集の刊行には Conference on the Jewish Material Claims to Germany からの助成を受けた。翻訳出版は原著者の許諾済み。訳文中の [] 内は訳者による。

**Eduard Nižňanský, Department of General History, Faculty of Philosophy, Comenius University in Bratislava, Slovakia.

*** 本学名誉教授

固有の反ユダヤ主義は、「敵性ユダヤ人」という心象を下敷きにするものであるが、それは、同党のいわゆる穏健派(ヨゼフ・ティソ [大統領])がスロバキア独自の反ユダヤ主義的政策を立案し、実施するときの根拠でもあった⁽²⁾。ティソの考えかたの基本は、^{ヌメウス・クラウスマス}「人数制限」の原則である。これによって、スロバキアで生活するユダヤ人は、社会・経済・専門的職業・文化の分野で、ほぼ4%に抑えられることになった。この割合は、全人口に占めるユダヤ人の人口比に当たる。フリンカ・スロバキア人民党の急進派(たとえば、ヴォイテフ・トゥカ [首相] やアレクサンデル・マッハ⁽³⁾ [内務大臣])は、スロバキア社会からユダヤ人を排除すればどうなるかということは一切考慮することなく、とくに1940年夏のザルツブルク会談以降になる

と^(補注)、反ユダヤ政策を実行に移した。したがって、スロバキアという国を代表する人たちの反ユダヤ主義的イデオロギーと行政および立法の領域における政策遂行との間には、因果関係があるというのが私の見解である。スロバキアの国の成立後、政府の反ユダヤ主義政策が次第に採用され、それが制度化されたことは、見て取ることができる。スロバキア国法律1939年第63号が「ユダヤ人」を定義づけたことから始まって、その後、ユダヤ人の財産目録の作成、ユダヤ人企業のアーリア化と清算、ユダヤ人マークの着用、ナチス

(1) Kamenec, Ivan. Phenomenon of the Holocaust in Historiography, Art and in the Consciousness of Slovak Society. In Vrzgulová, Monika and Daniela Richterová (eds.). *Holocaust as a historical and moral problem of the past and the present*. Bratislava: DSH, 2008, p. 332.

(2) 1939年1月、ヨゼフ・ティソは次のように述べた。「……ユダヤ人問題の解決法は、スロバキアのユダヤ人には、スロバキアの全人口との関係で、その数に見合った影響力だけが許されるということであろう。スロバキア人は、経済と産業の活動において完全に自己主張できるように教育され、現在ユダヤ人が占有している一切の地位を漸次引き継ぐことになるであろう。」In *Slovenská politika*, 27 January 1939, p. 2.

(3) アレクサンデル・マッハは、すでに1939年に次のように述べている。「金、宝石、金目のものを持っているユダヤ人たちは、どこでもぬくぬくとしているが、じきに我々もそうなるだろう。……働かざる者は食うべからず、である。彼らが盗んだものは、取り上げてしまえ! あらゆるユダヤ人問題にたいする現実的な解決策は、これだ!」In *Slovák*, 7 February 1939, p. 2.

(補注) 1940年に西ヨーロッパでナチス・ドイツが勝利を収めた後、アドルフ・ヒトラーは同年7月に中欧諸国の代表者と会談をもった。これ

によって、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアの諸国は、中欧を地政学的に支配しているのは誰かを思い知らされることになった。1940年7月28日、ザルツブルクでアドルフ・ヒトラーは、スロバキア大統領ヨゼフ・ティソ、同首相ヴォイテフ・トゥカ、同内務大臣アレクサンデル・マッハと会談した。スロバキアとドイツの関係の基本的性質は、1939年3月の「防衛条約」で定められていたために、ヒトラーは新たな条約を締結することを望まず、スロバキアの政治家にはどう振る舞えば良いかを考えられたいと理解を求めるだけであった。ナチス・ドイツはスロバキアの内政に干渉し、スロバキアの政治家が政府はもとより、フリンカ・スロバキア人民党やフリンカ警固団の中で、いっそう強力な親独的な政策を推進するよう要求したのである。こうして、首相のV.トゥカが新たに外務大臣になり、A.マッハは新たに内務大臣に就任するとともに、返り咲いてフリンカ警固団を束ねることになった。ただし、ドイツ側は、大統領のティソは優柔不断であるものの、スロバキアへの自国の要求を最もよく実行するからとして、ティソのことは余人をもって替えがたい人物であると理解していた。なお、このころ、ユダヤ人問題の顧問であるディーター・ヴィスリチェニーをはじめとする複数のドイツ人顧問官がスロバキアに入国することになった。(Nižňanský, Eduard at. all. *Slovakisch-deutsche Beziehungen 1938-1941 in Dokumenten I. Von München bis zum Krieg gegen die UdSSR*. Prešov: Universum, 2009, pp. 888-900 参照。) [この補注は、訳者の依頼により、執筆者が書き下ろした。]

強制収容所への強制移送が続いた⁽⁴⁾。

1942年のユダヤ人強制移送は、スロバキア政体（政府、議会、内務省（そして最終的には大統領））による反ユダヤ政策のクライマックスである。それは、公の場でのユダヤ人にたいする取扱いの論理的な帰結であった。ユダヤ人企業の清算とアーリア化だけでなく、専門的職業従事者の就業禁止は、ユダヤ人コミュニティを隅々まで貧困化させた。そして、スロバキアという国は、この貧しいユダヤ人を排除しようとした。こうして、国による反ユダヤ政策は、ナチスのホロコーストと歩調を合わせ目に見えて成果を挙げ、1942年にはユダヤ人がスロバキアから強制移送されることになった。1942年3月3日、首相ヴォイテフ・トゥカと内務大臣アレクサンデル・マツハは、強制移送の問題⁽⁵⁾をスロバキア政府に提起した⁽⁶⁾。1942年3月6日、トゥカは内務省で強制移送について次のように述べている。「ユダヤ人問題は、ユダヤ人をウクライナの地に漸次再定住させることによって解決されるべきものです。ユダヤ人が住まなければならない場所は、すでに示されてい

ます。わが国の領土を離れれば、もはやユダヤ人はスロバキア共和国の国民でなくなりません。ユダヤ人には14日間食料が提供されます。スロバキア共和国はユダヤ人一人につき500ライヒスマルクを支払う義務を負うこととなります。』⁽⁷⁾この3月6日には、スロバキアとドイツとの間で詰めた交渉が行われ、強制移送の手配だけでなく、強制移送されるユダヤ人の財産にとくに焦点が当てられた。1942年4月29日と1942年5月1日にドイツ側が作成したメモ⁽⁸⁾に記載された主要事項は、ユダヤ人の強制移送経費の支払⁽⁹⁾、市民権の剥奪⁽¹⁰⁾、強制移送されたユダヤ人をスロバキア領に帰還させないとしたドイツ側の確約であった。

1942年3月25日から10月20日までの間

(7) Ibid. pp. 146-148.

(8) より詳しくは、Nižňanský, Eduard. (ed.) *Holokaust na Slovensku 4. Dokumenty nemeckej proveniencie (1939-1945)*. (Holocaust in Slovakia 4. Documents of German provenance (1939-1945).) Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec, 2003, pp. 135-138 を参照。

(9) より詳しくは、Nižňanský, Eduard and Ivan Kamenec. *Poplatky za deportovaných slovenských Židov*. (Fees for deported Slovak Jews.) In *Historický časopis*, (Historical Journal,) Vol. 51, 2003, No. 2, pp. 311-342 を参照。

(10) 1942年5月15日に、スロバキア国憲法（1942年法律第68号）が制定された。これが、いわゆる強制移送法であり、これによってユダヤ人を強制移送し、市民権を剥奪することが可能になった。より詳しくは以下を参照。Nižňanský, Eduard. *Deportácie Židov zo Slovenska v roku 1942 a prijatie ústavného zákona č. 68/1942 Sl. z. o „vyst'ahovaní Židov“*. (Deportation of Jews from Slovakia in 1942 and the adoption of Constitutional Law No. 68/1942 Sl. z. on the “deportation of Jews”.) In *Studia historica Nitriensia X/2002*, (Studies of history Nitriensia Oct. 2002,) pp. 85-157; Zavacká, Katarína. *Protižidovské zákonodárstvo slovenského štátu*. (Anti-Jewish legislation of the Slovak state.) In Tóth, Dezider (ed.) *Tragédia slovenských Židov*. (The tragedy of the Slovak Jews.) Banská Bystrica: Datei, 1992, p. 73.

(4) スロバキアにおけるホロコーストの年譜については、たとえば、Nižňanský, Eduard. *Holocaust in der Slowakei*. In *Unterrichtsbeispiele zu den Verbrechen im Nationalsozialismus*. Berlin: Cultus e. V., 2005, pp. 7-17 を参照。

(5) 強制移送にいたる経過の詳細については、たとえば、Nižňanský, Eduard. *The discussions of Nazi Germany on the deportation of Jews in 1942 - the examples of Slovakia, Rumania and Hungary*. In *Historický časopis*, (Historical Journal,) vol. 59, 2011, suppl., pp. 111-136 を参照。

(6) Nižňanský, Eduard and Ivan Kamenec (eds.). *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke (1939-1945). Dokumenty*. (Holocaust in Slovakia 2. The President, the Government, the Sejm of the Slovak Republic and the State Council on the Jewish Question (1939-1945). Documents.) Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec, 2003, p. 142.

に、57本の移送列車がスロバキアを出発して、(同国のユダヤ人総数の3分の2に当たる)5万7628人⁽¹¹⁾が強制移送され、数百人を除いて、全員が死亡した。強制移送を実行したのは、スロバキア当局(とくに内務省第14局、フリンカ警護団、および運輸省)である。スロバキアには通過収容所が5ヶ所(ブラチスラバ=パトロンカ、ノヴァーカ、ポプラド、セレッジ、ジリナ)に設置され、ユダヤ人が集められ、そこから、ユダヤ人青年男女が最初に強制移送された。1942年4月11日には、家族ぐるみの強制移送が始まった。強制移送されるユダヤ人には、細かく定められた動産50個だけの携行が許された。スロバキア当局は、6本の強制移送列車を用意して、ユダヤ人をナチスの強制収容所に移送した。

ドイツ大使ハンス・ルディンは、1942年4月6日、ベルリンへの電報の中で次のように述べている。「ドイツ側からの圧力は皆無であったにもかかわらず、スロバキア政府は、すべてのユダヤ人をスロバキアから強制移送することに同意した。スロバキア司教座が介入したが、大統領までもがこの移送に同意した。……ユダヤ人の強制移送は、何の問題もなく粛々と進んでいる。」⁽¹²⁾

バチカン臨時代理大使ジュセッペ・ブルツィオは、強制移送が始まる前の1942年3月9日に、ブラチスラバからローマに宛てた書簡の中で早くも次のように述べている。「ドイツ軍の手に委ねて8万人をポーランドに強制移送することは、彼らの大部分にとって死刑宣告を意味する。」⁽¹³⁾

二人の脱走者のうちの一人、スロバキア出身のアルノシュト・ロジンが直面したスロバキアの状況とは、このようなものであった。通常であれば、ロジンとチェスワフ・モルドヴィッツが会うことはおそらくなかったであろう。二人は国も違えば、住んでいた都市も違うからである。ナチスによるホロコーストと第二次世界大戦中のスロバキアにおける反ユダヤ政策の結果、二人の運命が交わった。スロバキアからの強制移送の第一段階では、ロジンの物語は、1942年にスロバキアから強制移送されたユダヤ人約5万8000人と異なるところがない。しかし、1944年の脱走がすべてを変えた。

ヤン・ザボロフスキ(ポーランド)によれば、アウシュヴィッツ強制収容所からは、「合計667人の収容者が逃亡した。……知る限りでは、270名が収容所の看守に捕縛された。脱走に成功した100人の運命については、正確な記録がある。他の300人近い逃亡者の運命を正確に知っている者はいない。……アウシュヴィッツを脱走した英雄の3分の1はポーランド人(232人)であり、その他は多い順にロシア人(95人)、ユダヤ人(76人)である。」⁽¹⁴⁾

統計はこれくらいにしておく。1942年にアウシュヴィッツ収容所からの脱出を試みたが、失敗したスロバキア出身のユダヤ人数人については、その名前が分かっている。ダヌタ・チュクによると、最初に脱出を試みたのは、レオポルト・アルマシー(囚人番号32695番)で、1942年5月19日のことである。この歴史学者の記録によると、アルマ

(11) Slovenský národný archív (SNA), (Slovak National Archives (SNA),) fond MV, box (b.) 262, 12266/42.

(12) より詳しくは、Nižňanský, E. (ed.) *Holokaust na Slovensku 4...*, (The Holocaust in Slovakia 4...) pp. 127-128 を参照。

(13) Kamenec, Ivan, Vilém Prečan and Stanislav Škorvánek. (eds.) *Vatikán a Slovenská republika (1939-1945)*.

Dokumenty. (The Vatican and the Slovak Republic (1939-1945). Documents.) Bratislava: SAP, 1992, pp. 79-80.

(14) Zaborowski, Jan. *Bojové pole: Osvienčim*. (Battlefield: Auschwitz). In Sobański, Tomasz. *Úteky z Osvienčimu*. (Escapes from Auschwitz.) Bratislava: Pravda, 1982, p. 30-31.

シーの入所（より正確には、囚人番号の付与）は1942年4月24日である⁽¹⁵⁾。

1942年5月24日、マルティン・ヴァイス（囚人番号30715番、1942年4月17日登録）とツォルターン・ホッフフェルダー（囚人番号33319番、1942年4月29日にスロバキアから移送）が脱出を試みたが、失敗に終わった⁽¹⁶⁾。同日脱走したイザック・ヘルコヴィッツ（収容番号30256番、1942年4月17日登録）も失敗した⁽¹⁷⁾。

1942年6月4日、ヨゼフ・スピッツァ（囚人番号30223番、1942年4月17日登録）、フランツ・ハウザー（囚人番号31647番、1942年4月19日登録）、モリッツ・チトロン（囚人番号33603番、1942年4月29日登録）が脱走を試みた⁽¹⁸⁾。

1942年6月8日、ラディスラフ・リリエントール（囚人番号29878番、1942年4月17日登録）は、ポーランド人のヴィクトール・バンシク（囚人番号EH-2116番）と一緒に脱出を試みたが、失敗に終わった⁽¹⁹⁾。

これらの失敗した事案については、すべて「逃亡中に射殺」とだけ記されている。

1944年、二組のユダヤ人がアウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所からの脱走に成功し、首尾よくスロバキアに辿り着いた。アルフレッド・ヴェツラーやルドルフ・ヴルバとは異なり⁽²⁰⁾、A. ロジンとC. モルド

ヴィッツの脱走譚は、あまりよくは知られていない。その理由の一つは、先に述べた二人とは異なって、彼らがそれについて書くことがなかったからだとは私と考えている⁽²¹⁾。

本稿では、ロジンとモルドヴィッツの脱走譚を取り上げる。アルノシュト・ロジン⁽²²⁾（1913年3月20日スニナで生まれ、2000年にデュッセルドルフで死亡）は、強制移送の前に、20人のユダヤ人青年とともにスニナで拘束され、そこからフメンネに移され、その後ジリナのユダヤ人強制収容センターに連行された⁽²³⁾。そこで彼は最初の屈辱を味わうことになった。「……黒い制服に身を固めた看守。彼らが私たちに強制収容のイロハを教えました。悪態をつき、理由なく殴り蹴り、私物を強奪しました。」⁽²⁴⁾

ロジンは、スロバキアからの移送列車の出発の様子についても語っている。「約1000人の男性と一緒にジリナの駅に連行されて、牛運搬用の貨車に乗せられました。扉が閉めら

In Wetzler, Alfréd. *Čo Dante nevidel*. (What Dante didn't see.) Bratislava: Milanium 2009, pp. 312-321; Vrba, Rudolf. *Utekl jsem z Osvětimi*. (I escaped from Auschwitz.) Praha: Sefer, 2007; Wetzler, Alfréd. *Čo Dante nevidel. So správou Wetzlera a Vrba*. (What Dante didn't see. With the message of Wetzler and Vrba.) Bratislava: Milanium, 2009.

(21) Nižňanský, E. (ed.) *Holokaust na Slovensku 4...*, (Holocaust in Slovakia 4...) p. 487. 記録によると、この移送列車は4月4日にジリナを出発し、4月5日にズワルドンに到着した。しかし、公開されたドイツ軍の強制移送列車のリストによると、ユダヤ人男性を乗せたこの移送列車はルブリンに行くはずであった。

(22) 1942年のスロバキアのユダヤ人リストには、エルネスト・ロジンの名前がある。

(23) 1942年に強制移送が始まる前に、スロバキアでは、プラチスラバ=パトロンカ、ナヴァーキ、ポプラト、セレッジ、ジリナに強制収容センターが開設された。

(24) Yad Vashem Archives, Jerusalem (YVA), P 25/13. An interview with A. Rosin was recorded by E. Kulka in Czech in 1965/1966, p. 1.

(15) Czech, Danuta. *Kalendarium der Ereignisse im Konzentrationslager Auschwitz - Birkenau 1939-1945*.

Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Verlag, 1989, p. 214.

(16) Ibid., p. 216.

(17) Ibid.

(18) Ibid., p. 220.

(19) Ibid., p. 223.

(20) Kárný, Miroslav. *Historie osvětimské zprávy Wetzlera a Vrba*. (The history of the Auschwitz report by Wetzler and Vrba.) In Tóth, Dezider (ed.). *Tragédia slovenských Židov*. (The tragedy of the Slovak Jews.) Banská Bystrica: Datei, 1992, pp. 167-186; Kárný, Miroslav. *Osudy jedné zprávy*. (The fate of a report.)

れ、頑丈な南京錠で施錠され、命令を受けた多数のフリンカ兵が同行することになりました。何か悪い予感がしました。夜、列車はチャドカのほうに向かい、朝、ポーランド国境のズワルドンの駅に着くまで止まりませんでした。フリンカ兵が扉を開けて、貨車から降りるように命じました。人数を数えられてから、ドイツ兵に引き渡され、再び貨車に詰め込まれて、今度はドイツ兵の同行で旅を続けました。4月10日、私たちはオシフィエンチム＝アウシュヴィッツという名前の駅に到着しました。駅には制服を着た親衛隊員が待機していて、アウシュヴィッツ強制収容所〔基幹収容所〕に連行しました。〕⁽²⁵⁾

この供述は、事実と異なっている。ダヌタ・チェクによると、ロジンと一緒のスロバキアのユダヤ人グループがアウシュヴィッツ収容所に到着したのは、1942年4月17日である。さらに正確に言えば、この一行に囚人番号が付与されたのは、この日であり、ロジンの囚人番号は29858番であった⁽²⁶⁾。

国による公式のプロパガンダによれば、ロジンは「任務を帯びて」、スロバキアのユダヤ人青年男女を乗せた最初の移送列車で出国したとされていることを、ここでは想起しておきたい⁽²⁷⁾。

(25) Ibid, p. 1-2.

(26) Czech, Danuta. *Kalendarium der Ereignisse im Konzentrationslager Auschwitz - Birkenau 1939-1945*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Verlag, 1989, p. 199では、1942年4月17日、スロバキアからのユダヤ人973人に付与された囚人番号は、29832番から30804番までとなっている。[同書199頁によれば、一行973人のうち、17週間後の同年8月15日の生存者は88人、死亡者は885人である。]; 同書(p.786) [ロジンが脱走した1944年5月27日の項]には、ロジンの囚人番号は29858番と記載されている。[]内は訳注。以下同じ。

(27) Nižňanský, Eduard. *Antisemitská propaganda počas deportácií Židov v roku 1942*. (Anti-Semitic propaganda during the deportations of Jews in 1942.)

移送されたロジンは、強制収容所での自分の置かれた状況のひどさを即座に悟った。「2日目には早くも、そこがいかにも劣悪であるかを感じとりました。親衛隊が駅から私たちのほうに行進してきました。その速さは尋常ではありませんでした。私たちが通り抜けたゲートの上に、『労働は自由をもたらす(Arbeit macht frei)』という文言が架かっているのを見て、興味が湧きました。有刺鉄線を張り巡らせた高いフェンスと、頭を剃られ縞模様の服を着た収容者が目に入りました。どうなっているのだろうか。ここはどこなんだろうか。どうして囚人服を着ているのだろうか。私たちは犯罪者ではないのに。……あつという間もあればこそ、服を脱がされ髪を切られました。そうすると、親衛隊員が来て、私たちの名前を呼び、筆舌に尽くしがたいやり方で殴り、そして蹴りました。』⁽²⁸⁾

ロジンの供述によれば、基幹収容所〔オシフィエンチム地区のアウシュヴィッツ第1収容所〕にいたのは、わずか3日であって、その後アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所に連行され、収容所の拡張工事に従事した。彼の回想によると、そこでは約5000人の収容者(ソ連軍の捕虜とポーランド、フランス、スロバキアからの囚人)が働いていた。ロジンは、スロバキア出身のユダヤ人200人で編成された作業部隊に入ったが、その中から50人がゾンダーコマンドに選抜された。ロジン

In Nižňanský, Eduard and Michala Lónčíková et al (eds.). *Antisemitizmus a propaganda. Judaica et Holocaustica 5*. (Antisemitism and propaganda. Judaica et Holocaustica 5.) Bratislava: Filozofická fakulta Univerzity Komenského v Bratislave, Katedra všeobecných dejín, Univerzita Karlova v Praze, Fakulta humanitních studií, Poľský inštitút Bratislava, (Faculty of Arts, Comenius University in Bratislava, Department of General History, Charles University in Prague, Faculty of Humanities, Institute of Poland in Bratislava,) 2014, pp. 125-159.

(28) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, p. 2.

たちユダヤ人 50 人は、ビルケナウという名の「森の近くで深い穴」を掘ることになった。森の奥には農家があり、そこでユダヤ人がガスで殺害された。ロジンは、ユダヤ人の死体を穴の中に埋めなければならなかった。彼はそこで 20 日ほど働いた。本人が言うように、ロジンはとても運がよかった。ある友人(殺害されたユダヤ人からパンを盗んだゾンダーコマンド)からもらったパンの中に、金製の鎖があるのを見つけ、それをブロック書記(レオ・ポラーク)に渡して、14 号棟に替えてもらい、別の仕事を割り当てられることになった。彼によれば、命が助かったのはこのおかげである。ゾンダーコマンドの全員が、後に集団脱走未遂で処刑されたからである。1942 年 11 月某日、ロジンは 23 号棟のブロック長になった⁽²⁹⁾。その後、彼はチフスにかかったが、7 号棟で医務員として働いていたアルフレッド・ヴェツラー⁽³⁰⁾とヨゼフ・ツォルマンクによって救われた。回復後、ロジンは、ダニッシュという名のドイツ人の刑法犯がブロック長をしているバラックに収容された(殺人犯などの刑法犯は上着に緑色の印を付けていた)⁽³¹⁾。ダニッシュは、ビルケナウでチフスにかかり発熱したが、ロジンが見病して回復できたためか、スロバキアのユダヤ人たちを親身に治療した。ロジンは「私に接するとき以外は、ダニッシュは情け容赦ない無頼漢であり人殺しでした。彼の最期は、待避 [[死の行進]] の最中の収容者による撲殺だったと聞いています。」⁽³²⁾と云って、ダ

ニッシュのもう一つの顔を描いている。これは、収容所でのいびつな人間関係を示していると言えよう。

(アウシュヴィッツからのもう一人の脱走者であるルドルフ・ヴルバ⁽³³⁾(本名ヴァルター・ローゼンベルク)は、収容所レジスタンスがあったと言っているが⁽³⁴⁾、)ロジンの証言によると、収容所レジスタンスというもの、組織的な運動としては存在していなかった。以下は、ロジンのコメントである。「私の場合、レジスタンスと言っても、それは友人グループによるもので、その中にはバンデイ・ミュラー、フレッド・ヴェツラー、オタ・クラウス、エーリッヒ・シェーン、アルノシュト・シェーン、アーダ・ローゼンフェルト、ホンツァ・チェシュピヴァなどがいました。私たちは、どのような情報のかけらでも拾い集め、それを仲間内で交換し、しばしば自分をだまして、物事が良い方向に向かうはずだと思うことにしました。…… 私たちは、一切れのパンを分け合い、友人に衣服や靴を提供し、より良い仕事を回すようにしました。病気のときには、回復するまでブロック内で目の届かない場所に隠して選別から逃れることができるようにしました。『体を洗え、背筋を伸ばせ、やつらには撲殺されるな』と云って、互いに励まし合いました。…… 誰かを助けるなど、できようはずがありませんでした。それだけの体力がなかった

(29) Ibid., p. 5.

(30) より詳しくは、Wetzler, Alfréd. *Čo Dante nevidel.* (What Dante didn't see.) Dunajská Lužná, Bratislava: MilaniuM, Pavel Zrinyi, 2009 を参照。

(31) 強制収容所では、ユダヤ人には黄色の星、政治犯には赤、殺人犯には緑、エホバの証人には紫、同性愛者にはピンクなどの印が付けられた。また、色の組み合わせもあった。ユダヤ人が共産主義者である場合は、黄色と赤色の 2 枚が使われた。

(32) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, p. 6.

(33) ロジンは証言の中で、ヴルバの性格を次のように言っている。「ヴルバは幻想を抱く冒険好きの少年で、脱走して、ビルケナウの真実を全世界に伝えることを夢想していました。…… 著書の中でヴルバは、ヴェツラーのことを相棒としてではなくて、まるで携行荷物でもあるかのように書いています。」YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, recorded by E. Kulka.

(34) より詳しくは、Vrba, Rudolf. *Utekl jsem z Osvětimi.* (I escaped from Auschwitz.) Praha: Sefer, 1998 を参照。

のです。』⁽³⁵⁾

1943年の春、上述したドイツ人刑法犯ダニッシュがロジンのところにやってきて、新たに検収収容区(BⅡa収容区)が開設されることになった、については新しい書記が欲しいと言った。ヴェツラーとロジンは一致して、新しい書記訓練要員としてバンディ・ミュラーとルドフ・ヴルバを推薦した⁽³⁶⁾。ロジンはヴルバに語りかけてでもいるかのように、次のように言っている。「ルド⁽³⁷⁾、君は本を書くときも収容所での友人のままでいるべきだった。まるで他に誰もいなかったかのように、賞賛を独り占めするのは間違っている。君が脱走したとき、フレッド⁽³⁸⁾は、君よりも6歳年上で、分別ある思慮深い男だった。それにたいして、まだ君は未熟な18歳の少年だった。』⁽³⁹⁾

ロジンによると、1944年4月7日にヴェ

ツラーとヴルバが脱走したとき、ロジンとヴェツラーの友人であったことは誰もが知っていた。そのため、ロジンは一番乱暴に尋問され、歯が折れてしまうほどであった。ロジンは、銃殺されても仕方がないと思っていた。「ヴェツラーが逃げようとしているのを知っていたならば、私も一緒に逃げたと思う。ここで待っているのは、死だけであることを知っているからだ。』⁽⁴⁰⁾と言った。こう言ったから命が救われた、とロジンは考えている。かくして、ロジンには「レッド・ポイント」⁽⁴¹⁾が与えられた。とは言っても、たとえ作業のためであっても、収容所から出ることはまかりならぬということになった。脱走の動機について、ロジンは、次のように述べている。「ビルケナウはまるで地獄でした。収容区が満杯になると、新しい収容区が開設され、昼も夜も死体焼却場と野外の死体焼却溝からは炎が上がっていました。収容所そのものが丸ごと終焉を迎えることは、避けられないほど近くまで来ている、そのことが分かりました。もう待つことができませんでした。脱走中に死ぬほうがましだと思いました。脱走が唯一のチャンスだと分かっていました。でも、真の味方がどこにいるのか、分かりませんでした。』⁽⁴²⁾ロジンのバラックには、アダム・ルジュニツキというカポが住んでいた。このカポは、ポーランドのユダヤ人チェスワフ・モルドヴィッツ⁽⁴³⁾に、砂利採取作業班の書記をさせていた。ロジンは、ルジュニツ

(35) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, p. 6.

(36) ヴルバは著書の中で、収容所のレジスタンス組織によって自分は収容所に送られたと主張している。より詳しくは、Vrba, Rudolf. *Utekl jsem z Osvětimi*. (I escaped from Auschwitz.) Praha: Sefer, 1998を参照。

(37) ルドルフ・ヴルバのこと。本名ヴォルター・ローゼンベルク(1924年~2006年)。ヴルバは、その著書の英語版『許せない』(Vrba, Rudolf, *I Cannot Forgive* (Vancouver: Recent College Publishing 1997, p.368f.))の中で、共産主義の国チェコスロバキアにいたヴェツラーやモルドヴィッツに配慮したから、1960年代の原著では名前を出さなかったと書いている。

(38) アルフレッド・ヴェツラーのこと。より詳しくは以下を参照。Kamenec, Ivan. Alfréd Wetzler. *Nechcený hrdina z Osvienčimu*. (Alfréd Wetzler. The unwanted hero of Auschwitz.) In Michálek, Slavomír and Natália Krajčovičová et al. (eds.). *Do pamäti národa*. (In the memory of the nation.) Bratislava 2003, pp. 667-670; Wetzler, Alfréd. *Čo Dante nevidel*. (What Dante didn't see.) Dunajská Lužná, Bratislava: Milanium, Pavel Zrinyi, 2009.

(39) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin. ロジンはこのインタビューで、ヴェツラーとヴルバによる1944年の脱走の準備について証言している。

(40) Ibid, p. 10.

(41) Rotpunkt (ドイツ語)。[登山用語で、2回目以上のトライで完登するという謂。ここでは、次の脱走の機会が与えられたことを意味する。]

(42) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, p. 11.

(43) チェスワフ・モルドヴィッツ。1919年、ポーランド・ムワワ生まれ、2001年、カナダ・トロントで死亡。1942年12月、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所に収監。囚人番号84216番。戦後、プラチスラバに住み、1965年、イスラエルに移住。

キが「カナダ」(移送列車が運んでくる服、靴などの物品を保管するブロック)から何かを盗ってくる手伝いをしていた。そのとき、ルジュニツキはロジンに、脱走を手助けしてやろうかと言ったのである。ロジンによれば、ルジュニツキはユダヤ人ではなかったし、砂利の採取孔に隠れるのを手伝ってくれた受刑者もユダヤ人ではなかった。1942年からアウシュヴィッツに収容されていたモルドヴィッツは、ロジンが脱走するときの相棒になった⁽⁴⁴⁾。

とは言え、ヴェツラーとヴルバが脱走してからというもの、ロジンは厳しい監視下に置かれていて、収容所からの脱走は困難であった。収容所からの脱走は、実に劇的だった。彼は次のように語っている。「モルドヴィッツと私は、土曜日に脱走することで意見が一致しました。1944年5月27日だったと思います。私はとても気持ちが昂ぶり、パンツ2枚とシャツ2枚を重ね着して寝棚で準備していました。……ハンガリーからの大規模な移送列車が到着したばかりで、『カナダ』の少年たちが酒を持ってきました。緊張と興奮を抑えようとして、少し飲みました。……当番のブロック司令はゲーツェでした。私は、彼に缶詰を数個渡して、ハンガリーの親戚が隣のBIIc収容区に入ったので、少しの間彼らに会わせて欲しいと頼みました。ゲーツェは缶詰を受け取り、入れ墨した私の囚人番号29858番を紙に書き留めて、後で行かせてやると約束しました。しかし、その後、私がゲートに行こうとすると、[ブロック長の]ダニッシュが『どこへ行くんだ』と私を呼び止めたので、引き返さなければなりません。次にまた試みましたが、今度は収容所司令官の[ヨハン・]シュヴァルツフーバーに止められて、またしても自分のバラッ

クに戻らねばなりません。本当についていないと思いましたが、モルドヴィッツとの約束がありますので、もう一回やることにしました。ゲーツェはまださっきの場所にいて、私がゲートを通り抜けるとき、私のことを知っていました。『すぐに戻ってこい!』『はい、すぐに戻って参ります、ブロック司令殿。』私はそう応えましたが、緊張と不注意から、バラックの標識腕章を着用したまま出てしまいました。それに気づいたのは、落ち合った場所に行く途中でした。またしても注意が足りなかったのですが、その腕章は道端に捨ててしまいました。』⁽⁴⁵⁾

ハンガリーからの移送列車が(1944年5月15日から大量に)到着して、収容所は混乱していた。実は、ロジンとモルドヴィッツは、その状況を利用して、1944年5月27日に脱走することができたのである⁽⁴⁶⁾。ロジンは、砂利採取場近くの給水所でモルドヴィッツと落ち合った。そこには「^{フンカー}掩蔽壕」が掘られていた。それは、幅1.20^{メートル}、深さ1^{メートル}の穴で、その上を木で覆い、支柱で支えていた。二人はその穴に入り、ポーランド人の収容者に砂利をかぶせてもらった。軍用犬の追跡から逃れるために、石油に浸したタバ

(45) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, pp. 12-13.

(46) より詳しくは、Czech, Danuta. *Kalendarium der Ereignisse im Konzentrationslager Auschwitz - Birkenau 1939-1945*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Verlag, 1989, p. 786を参照。[「二人のユダヤ人囚人アルノシュト・ロジン(囚人番号29858番)とチェスワフ・モルドヴィッツ(囚人番号84216番)がアウシュヴィッツ第2収容所から脱走した。二人は、スロバキアに到着後、逮捕されたが、脱走と投獄のニュースが、ある秘密組織に伝わったところ、1万コルナが集まり、刑務所から自由を買い取った。……二人の報告文書は、ヴェツラーとローゼンベルク[ヴルバ]の報告文書とともに、スイス、イギリス、アメリカに送付された。』Czech(同上書786頁)の1944年5月27日の項による。]

(44) YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, recorded by E. Kulka in Czech in 1964.

コを近くにばらまいた。二人は、脱走にたいする厳しい警戒措置が解除されるまでの3日間、この穴の中でじっとしていることになっていた。彼らは、ヴェツラーとウルバが使用したのと同じ「掩蔽壕」を使い、同じ方法を採用した。親衛隊が脱走者の捜索を開始したならば、脱走者は収容所内に潜伏するというのが、このような脱走のときの鉄則であった。脱走した囚人を捜索するときの厳格な措置が終了する3日が経ってから、ヴェツラーとウルバは隠れ家にしてきた「壕」を出ることにした。だから、ロジンとモルドヴィッツも「壕」の中に隠れて、厳重な警戒措置の解除を告げるサイレンが鳴るのを待ったのである⁽⁴⁷⁾。

「壕」の中で過ごす時間は大変だった。最初の3日間は、収容所から脱走した囚人を追跡する第一段階であった。そのために、3日間は、「壕」に留まらなければならなかった。それは分かっていたが、耐えることは困難であった。ロジンはそのことを次のように語っている。「本当に怖かった。気が動転して、心臓が早鐘のように打ちました。だんだん息苦しくなり、窒息するかと思いました。3時間かけて息ができる箇所を探しましたが、見つかりませんでした。私たちは決死の覚悟で危険な行動に出ました。私たちは『壕』の入り口に架かっている梁を内側に引き込んだのです。入り口を覆っていた砂利が中に入り込み、『壕』が狭くなってしまいました。でも、少しですが、息ができるようになりました。」⁽⁴⁸⁾

二人には3日間の潜伏は無理だった。「……2日目の日曜日の夜には、もう我慢できなくなりました。手足がしびれ、動けなくなりました。私たちは、『壕』から見える2つの監視塔の間を腹ばいで抜けることにしました。……その晩は幸運に恵まれました。

ハンガリーからの移送列車が何本もランブ[降車場]に到着し、収容所全体が騒然として混乱し、蒸気機関車の汽笛、騒音、叫び声、軍用犬の吠える声が聞こえ、監視塔の真下を這って行っても、監視兵は私たちの気配に気づくことがなかったからです。……私たちの『壕』から400^{メートル}と離れていない死のビルケナウ収容所は、移送列車で溢れていました。選別された移送者が、軍用犬を連れて、殴り怒鳴りつける親衛隊の手で火葬場へと連れて行かれる、まさにその瞬間に、私たちは地獄に背を向けて脱走しました。」⁽⁴⁹⁾

ロジンの描写は的確である。ロジンとモルドヴィッツは、ハンガリーのユダヤ人が選別直後に殺害されようとしている、まさしくその状況を利用して逃亡したのである。

モルドヴィッツはポーランド人なので、最初は、二人はスロバキアには行きたくなかった。クラクフに行くか、あるいは収容所内で噂されていたように、その近くのパルチザンに加わりたと思っていた。ソラ川を泳いで渡るとき、二人とも靴をなくした。その後、収容所から20^{キロ}ほど離れたチェルメクという町の近くに来た。歩くのは夜だけにして、昼間は休んだ。食べ物がある限り、人家を避けて森の中を移動した。脱走の3日目によりやく、森の中の一軒家で古靴とパンを少々もらうことができた。クラクフから15^{キロ}ほど離れたところで、数人の男が捕まり、労働に駆り出されたという話を聞いて、パルチザンを探すことにしたが、果たせなかった。二人を信用した者は誰もいなかった。疑惑の目で見られたのである。そこでやむなく、スロバキアに行くことに決めた。ロジンの次の証言は、彼らの状況を実によく表している。「私たちは希望を失い、歩き続ける元気も失ってしまいました。収容所を脱出しさえすれば、万事がうまくゆくと信じていました。誰にで

(47) YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, p. 1.

(48) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, p. 14.

(49) Ibid.

あろうと頼めば、私たちを助けてくれるのではないかと思っていました。しかし、私たちは収容所を出てみて、恐ろしくなりました。一步進むたびに、危険が潜んでいるように思われました。見つけられるのではないかと、捕まって収容所に連れ戻されるのではないかと恐ろしくなりました。……日が暮れてから、モルドヴィッツと話してみました。自由の身になって収容所の外にいるのに、二人とも、収容所の中とほとんど同じくらい恐れていることが分かりました。ビルケナウでは、私たちはどちらかと言うと年長の囚人でしたから、それなりに平穏な生活を送っていました。死が待っているという考えに、私たちは慣れっこになっていました。その瞬間をできるだけ先送りする術も^{すべ} ^{わざ}棄えていました。……しかし、収容所の外は、異国の地でした。私たちには経験がありません。光も、今いる場所も、人間も、すべてが恐ろしかったのです。暗闇の中にいるときしか、心が休むことはありませんでした。脱走が成功したという興奮、そして外界に情報を届けてやるという興奮は、体力の衰えとともに次第に弱まってしまいました。』⁽⁵⁰⁾

二人は、汽車の切符を買ったことがある。ノヴィ・タルグ経由でザコパネに向かう列車に乗車した。満員だったこともあるが、検札を免れたくて屋根の上に座った。ノヴィ・タルグの手前で列車を飛び降り、徒歩で移動した。線路づたいに道を探して、ついにスロバキア領内へと越境することができた。連合軍がノルマンディーに侵攻したDデーの日、1944年6月6日のことである。使い古しのマッチ箱から、スロバキアにいることが分かった。政府のプロパガンダが言う「強制移送されたユダヤ人にしてスロバキアの敵」ロジンは、そのときのことを次のように述べている。「私は地に膝を付けて、祖国スロバキ

アの大地に口づけしました。恐怖と不安は雲散霧消し、祖国に着き生まれたこの国で自由を得た気がしました。ここはファシストの国スロバキアであり、フリンカ派の人々とフリンカ兵が君臨していることをすっかり忘れていました。』⁽⁵¹⁾。その後、二人はパブにいるところをスロバキアの憲兵隊に逮捕され、ニジュナ・アプシャで尋問された。彼らは、スロバキア人でドイツでの強制労働から逃亡してきたと供述した。ユダヤ人であることがばれては困ると思っていたが、とうとう、彼らはユダヤ人であることを白状した。その後、彼らは警察によってシュピッシューカー・ストラー・ヴェスの裁判所のある建物まで護送された。その途中、二人は憲兵に何度も、「射殺しろ。生きて連行できると思うな。」と言った⁽⁵²⁾。裁判所の建物に入ると、ロジンは、スロバキア人でスニナ出身の知人、アラダール・ユハースがいるのに気づいた。有り^あ体^{てい}に言えば、二人を救ったのはこの男性である。二人は、村を巡り回って金や外貨を買っているユダヤ人であると自白することにした。そして、彼らは、地元のユダヤ人から一人3ドルずつを拠金してもらって、憲兵隊員にくぼくかの金を握らせた。かくして、二人は「外貨の闇屋」としてリプトフスキー・ミクラーシュの財務局に護送されることになった。一時は、ケジュマロクまで連れて行かれたこともある。汽車でリプトフスキー・ミクラーシュに戻ってみると、駅にはヴルバとヴェツラーがいて驚いた。この二人はユダヤ人老人ホームに住んでいた。ロジンとモルドヴィッツの二人は、地元のユダヤ人コミュニティがお金を出してくれるまでの数日間、刑務所にいなければならなかった。釈放後、二人はグライヒ家で草鞋^{わらじ}を脱いだ⁽⁵³⁾。

(51) Ibid, p. 17.

(52) Ibid, p. 19.

(53) Ibid, p. 20-1.

(50) Ibid, p. 16.

その後、モルドヴィッツとロジンは、地元ユダヤ人コミュニティの代表者たちにあの手話をした。彼らのほとんどは、すでにヴェツラーとヴルバから話を聞いていた。ブラチスラバのユダヤ人センター (*Ústredňa Židov*) のカミル・クラスニャンスキーとオスカー・ノイマンが、二人に会うためにミクラージュにやって来た⁽⁵⁴⁾。ロジンによると、二人は、1944年4月以降の状況、とくにヴェツラーとヴルバが目撃していなかったハンガリーのユダヤ人の強制移送にかんする情報を伝えて、ヴルバとヴェツラーの証言を補完した。モルドヴィッツの供述も同様である。「クラスニャンスキーを始めとする関係者は、少なからずフレッド⁽⁵⁵⁾とルディ⁽⁵⁶⁾による報告文書の信憑性を検証した上で、私たちの証言に基づいて一から新しい報告文書を編纂しようとしました。報告文書が5頁を超えたのは、そのためです。」⁽⁵⁷⁾

今となっては、保存されているロジンとモルドヴィッツの報告文書は、ヴェツラーとヴルバの報告文書⁽⁵⁸⁾を補完するものでしかない。しかし、ロジンとモルドヴィッツの報告文書は、ヴェツラーとヴルバが脱走した後の、1944年4月から5月におけるアウシュヴィッツの状況[という新しい情報]を伝えている。それは、ギリシャとポーランドのユダヤ人の強制移送のことを述べており、ハンガリーからの最初の強制移送列車の到着にか

んする記録でもある⁽⁵⁹⁾。ハンガリーからの大量移送が始まったのは、5月15日である。連日約1万4000人から1万5000人のユダヤ人が到着した。ロジンとモルドヴィッツによれば、これらのユダヤ人のうち収容所に収容されたのはわずか10%にすぎない。それ以外はただちにガスで殺害され、その死体は焼却された。ハンガリーからのユダヤ人でそのときに生存していた者は、[囚人番号の]入れ墨もされないままに、後に他の収容所(ブーヘンヴァルト、マウトハウゼン、グロスローゼン、グーゼン、フロッセンプルクなど)に送られたとも述べられている。ロジンとモルドヴィッツは、フランスから「アーリア人」を乗せた移送列車が到着したこと、テレジーン[テレジエンシュタット]から移送列車が到着したことも記録に留めている。さらにまた、二人は、5月にハインリッヒ・ヒムラーが収容所を訪問したことにも言及している。彼らは、アウシュヴィッツの総司令官の名前(アウマイヤー、シュヴァルトフーバー、ヴァイス、ハーテンシュタイン、ヘス、クラマー)を挙げることも忘れてはいない⁽⁶⁰⁾。

アウシュヴィッツ強制収容所とユダヤ人殺人工場について一般大衆に知らせたことの功績にかんするロジンの言は、次のとおりである。「他の人たちの名前を挙げるのを忘れて、すべての手柄を独り占めしていることを除けば、ヴルバの著書は全体として、真実を語っています。私たちは皆、同じ理由で脱走し、『アウシュヴィッツ・レポート』によって世界にたいして情報提供を成し遂げ手柄を立て

(54) 興味深いことに、オスカー・ノイマンはその著書の中でロジンとモルドヴィッツの名前を挙げていない。より詳しくは、Neumann, Oskar. *Im Schatten des Todes*. Tel Aviv: Olamenu, 1956を参照。

(55) アルフレット・ヴェツラーのこと。

(56) ルドルフ・ヴルバのこと。

(57) YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, p. 5.

(58) ヴェツラーとヴルバによる報告文書にかんする詳細については、Wetzler, Alfréd. *Čo Dante nevidel. So správou Wetzlera a Vrba*. (What Dante didn't see. With the message of Wetzler and Vrba.) Bratislava: Milanium, 2009, pp. 276-311を参照。

(59) より詳しくは、Gaško, Mikuláš. *Nad úkrytom. (Above the shelter.)* Bratislava: SAK, 2014, pp. 65-67を参照。

(60) より詳しくは、Szenes, Sándor and Frank Baron. *Von Ungarn nach Auschwitz. Die verschwiegene Warnung*. Münster: Westfälisches Dampfboot, 1994, pp. 153-161を参照。

たのであり、その手柄は皆同じであるべきだと思います。』⁽⁶¹⁾

ロジンは、アウシュヴィッツ＝ビルケナウの状況の話聞いたスロバキアのほとんどの人が不信感を抱いていたことも記憶している。「話を聞いた人たちはショックを受け、ほとんどの人が、『それはひどい』と言いました。しかし、そう言ってから、彼らは根掘り葉掘り問い質し、そして胡散臭く思うようになりました。私たちは疑問にたいして一々、その仔細を説明しましたが、理解されませんでした。不信感が残ったままでした。絶滅収容所からの絵葉書や手紙が届いていたことが強く作用して、疑念を募らせたのです。1944年には、ビルケナウから手紙が数多く届くようになっていたこともあります。……それらの手紙は直接ではなく、ユダヤ人センター⁽⁶²⁾を経由して送られました。そのために、いっそう信用されていました。私たちの報告文書と似たようなことを書いている手紙は、その中にはありませんでした。何か書かれていても、分かりやすい表現ではなく、文面は寓意的で曖昧でした。』⁽⁶³⁾

その後、ユダヤ人センターの幹部が二人の

面倒を見ることになり、「アーリア人」証明書を手に入れた（ロジンはシュテファン・ロハーチという名の新しい身分証明書を与えられた）。彼らは、ユダヤ人出生証明書を交付されて、ユダヤ人マークを着衣に縫い付け、定期的に経済支援も受けた。4人の脱走者は全員、ブラチスラバに転居させられた。

1944年6月、脱走者の代表とバチカンの代表が会合をもつことになった。1944年6月20日頃⁽⁶⁴⁾、モルドヴィッツとヴルバは、ブラチスラバ近郊〔北東約15km〕のスヴェティ・ユールの修道院でバチカンの代表と会うことになった⁽⁶⁵⁾。

モルドヴィッツによれば、この会見はユダヤ人センターのカミル・クラスニヤンスキーの仲介による。リプトフスキー・ミクラージュでロジンと一緒に作成した報告文書は、教皇の特使と名乗るモンシニョール・ジュセッペ・ブルツイオ師に手交したとモルドヴィッツは言っている⁽⁶⁶⁾。今日では、この点にかんしてモルドヴィッツは間違っていることが分っている。修道院で二人と会見したのは、モンシニョール・マーリオ・マルティロッティ師だったからである⁽⁶⁷⁾。

(61) YVA, P 25/13. Interview with E. Rosin.

(62) ユダヤ人センター (*Ústredňa Židov*) の設立は、1940年9月である。スロバキアの全ユダヤ人がその会員になった。より詳しくは、以下を参照。Hradská, Katarína. *Gizi Fleischmannová. Návrát nežiadúci.* (Gizi Fleischmann. Return unwanted.) Bratislava 2012; Hradská, Katarína (ed.). *Holokaust na Slovensku 3. Listy Gisely Fleischmannovej (1942-1944). Dokumenty.* (Holocaust in Slovakia 3. Letters of Gisela Fleischmann (1942-1944). Documents.) Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec 2003 (Milan Šimečku Foundation, Jewish Religious Community 2003); Hradská, Katarína. *Holokaust na Slovensku 8. Ústredňa Židov. Dokumenty.* (Holocaust in Slovakia 8. Jews Centre. Documents.) Bratislava: DSH, 2009.

(63) YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, p. 24.

(64) C. モルドヴィッツは、証言の中で7月も10日すぎになってようやく会合が叶ったと主張している。より詳しくは、YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, p. 4を参照。

(65) より詳しくは、Kárný, Miroslav. *Historie osvětimské zprávy Wetzlera a Vrba ...*, (The history of the Auschwitz report by Wetzler and Vrba ...) p. 170を参照。

(66) モンシニョール・ジュセッペ・ブルツイオ師は、1940年から1945年にかけて、バチカンの代理大使としてブラチスラバで任務に就いた。[モンシニョール (Monsignor (Msgr.)) は、教皇庁の司教補佐以上にたいする尊称。]

(67) ヴルバによれば、その人はモンシニョール・マーリオ・マルティロッティ師である。より詳しくは、Vrba, Rudolf. *I Cannot Forgive.* Vancouver: Recent College Publishing 1997, p. 369を参照。チェコの歴史学者ミロスラフ・カルニーもその人

モルドヴィッツは、この会見について次のように語っている。「情報のどのような断片であろうと、また片言隻句であろうと、それは師に衝撃を与えました。師は私たちの話をしばしば遮^{さへぎ}って、私たちのことを生き証人だと言い、世界が知るべき歴史の目撃者として、私たちを未来に送り届けるためには、いかなることも惜しまないと言いました。……ユダヤ人の命だけでなく、他の国籍の人々の命も危ういことを説明しました。師は、聖職者の運命はどうなるかと尋ねました。とくに私たちが強調したのは、世界中の人々がまったく何も知らない聖職者たちの運命についてでした。師がもっとも強く関心を寄せているのは、それだろうと考えたからでもあります。師は一種の放心状態に陥ったように見えました。師は、会見を中断して、気分が悪いので休憩させてほしいと言いました。私は、師が気を失ってしまうのではないかと心配しました。」⁽⁶⁸⁾

モルドヴィッツは証言の中で、バチカン代表との話し合いでヴルバが果たした役割についても触れて、次のように言っている。「ヴルバが自分ひとりの手柄だけを強調している著書を読んでみて、困ったものだと思います。私たちのこの段階での活動については、自分以外は誰のことに触れていないからです。……教皇代理大使との会見にかんしても、私の名前は出てきません。その場に二人が一緒にいたということすらも書かれて

はマルティロッチェ師であると言っている。カルニーの見解は、バチカンが編集した *Actes et Documents du Saint Siège Relatifs à la Seconde Guerre Mondiale* (第二次世界大戦にかんする教皇聖座の行為と文書), Vol. 10, Vaticano 1980, Document 204, p. 281 に基づいている。詳しくは、Kárný, Miroslav. *Historie osvětimské zprávy Wetzlera a Vrba...*, (The history of the Auschwitz report by Wetzler and Vrba...) p. 170 を参照。

(68) YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, pp. 2, 6.

いません。本当に腹が立ちます。…… ルドルフはまだ19歳で、若く、そのために、彼はしばしば子どもじみた振る舞いを見たのを見たことがあります。詳しくは触れたくありません。彼は自著で書いているようには積極的ではありませんでしたし、そうであることもできませんでした。…… 会見中、彼は積極的ではなく、その態度はむしろ受け身でした。」⁽⁶⁹⁾

ニトラ出身のラビ、ミハエル・ドブ・ヴァイスマンデル師⁽⁷⁰⁾も彼らに会い、その話を記録し、その報告文書をスイスとトルコに送った⁽⁷¹⁾。

モルドヴィッツの回想によれば、(スロバキア国民蜂起が勃発する前の)1944年8月に、彼はヴェツラーと一緒に、ヴェツラーの兄弟が住んでいたニトラに行き、アルフレッドの家族とともに大司教カロール・クメトコ師の屋敷に数日間隠れた。モルドヴィッツによ

(69) YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, pp. 6-7; このようなモルドヴィッツの主張にたいして、ヴルバは1997年の英語版だけではあるが、次のように反論している。「モルドヴィッツについてまったく触れなかったのは、私は1958年に共産主義国チェコスロバキアを離れ、執筆した年(1963年)にはイギリスに住んでいたからである。モルドヴィッツは、当時まだアントニン・ノヴォトニーによる新スターリン主義体制下のプラチスラバで暮らしていた。私とモルドヴィッツの密接な関係をイギリスで公言してしまえば、『バチカンのスパイ』だったとか、『異端の亡命者ヴルバと密接な関係がある』などと非難され、問題になったかもしれない。」より詳しくは、Vrba, Rudolf. *I Cannot Forgive*. Vancouver: Recent College Publishing, 1997, p. 368ff. を見よ。モルドヴィッツはトロントに住んでいたが、ヴルバとは会っていない。

(70) ハイム・ミヒヤエル・ドブ・ヴァイスマンデル師(1903年~1957年)は、ニトラ出身で正統派に属すラビであり、強制移送からユダヤ人を救出しようとした、いわゆる「作業部会」[非合法組織]の重要な代表者であった。

(71) Vrba, Rudolf. *I Cannot Forgive*. Vancouver: Recent College Publishing 1997, p. 369.

ると、二人は大司教に報告文書を手交した。[バチカンの臨時代理大使ジュセッペ・]ブルツィオ師に送られたのは、それだということである⁽⁷²⁾。

モルドヴィッツは、ヴェツラー、ロジン、ヴルバ、そしてロジンの友人ヨゼフ・オンドリアーシュと一緒にブラチスラバに住んでいた。オンドリアーシュは警官だったにもかかわらず、これらの人たち全員に手を貸した。モルドヴィッツはそのことについて次のように証言している。「私はフレッド [アルフレッド] と一緒にアパートに住みました。ルドルフはアルノシュトと一緒に、間借りしました。全員が偽造身分証明書を使いました。そのアパートには、ロジンと出身地が同じで警官のオンドリアーシュも住んでいました。そのために、皆、気楽でした。オンドリアーシュは皆にできるだけのことをして助けてくれました。…… 彼はとても親切で誠実で、とくにアルノシュトには力を貸しました。ルダ [ルドルフ] がパルチザンに入隊し、私が逮捕されると、オンドリアーシュとアルノシュトは別の場所に下宿しました。』⁽⁷³⁾

彼らが別れることになったのは、[スロバキア国民] 蜂起勃発の後である。ユダヤ人センターの幹部たちは、もう彼らの面倒を見ることができなくなってしまったからである。ヴルバは母親の住むトルナバに向かった。その後パルチザンに加わったが、わずか2ヶ月でブラチスラバに舞い戻ってきた。ヴェツラーは兄弟の住むニトラへ行った。

モルドヴィッツは、王宮レストランでヴェツラーの義理の姉妹と同席していたところを逮捕された。ユダヤ人の女性と同席していると疑われたのである。彼は逃げようとしたが、プリンカ兵に捕まり、手ひどく殴られて、意

識不明のままプリンカ警備隊の司令部に担ぎ込まれた。尋問は、セレッジのユダヤ人労働収容所の司令官ヨゼフ・ヴォツァールが担当した⁽⁷⁴⁾。取調のとき、彼はうまくスロバキア語を話すことができなかった。そのために、ソ連の職員ではないかと疑われた。取調の間中、看守は拷問の手を休めなかった。「私は、誰と会っていたのか、どこに住んでいるのかと問われましたが、どこにも住んでいない、誰とも会っていないなどと答えました。そのために、ひどく殴られました。ヴォツァールは、顔を見てみろと言って鏡を渡し、1時間に少なくとも12回は気を失っていたぞと言いました。それくらいひどい虐待を受けました。』⁽⁷⁵⁾ モルドヴィッツは、とにかくロジンについては何も言うまいと決めた。とうとう、モルドヴィッツは、自分がユダヤ人であり、しかもスロバキア人であると白状した。彼は、ズボンのポケットにレヴォチャ出身のコロマン・アルトマンという名前の身分証明書を入れていたのだが、ヴォツァールはそれを鼻にも掛けなかった。

(74) より詳しくは、以下を参照。Hlavinka, Ján and Eduard Nižňanský. *Pracovný a koncentračný tábor v Sereďi 1941-1945.* (Labour and concentration camp in Sereď 1941-1945.) Bratislava: DSH, 2009; Hlavinka, Ján, Eduard Nižňanský and Radoslav Ragač. *Koncentračný tábor v Sereďi vo svetle novoobjavených dokumentov (september 1944 - marec 1945).* (Sereď concentration camp in the light of newly discovered documents (September 1944 - March 1945)) In Kováčová, Viera et al. *Druhá vlna deportácií Židov zo Slovenska: Medzinárodná vedecká konferencia 8. september 2009, Zvolen, Slovenská republika, Technická univerzita vo Zvolene.* (The Second Wave of Deportations of Jews from Slovakia: International Scientific Conference 8 September 2009, Zvolen, Slovak Republic, Technical University in Zvolen.) Banská Bystrica: Múzeum Slovenského národného povstania, (Museum of the Slovak National Uprising,) 2010, pp. 50-80.

(75) YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, pp. 12-14.

(72) 93 YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, p. 9.

(73) Ibid, p. 10.

その後、彼はゲシュタポに送致された。モルドヴィッツには、置かれた立場がとても悪くなったことが分かった。「……服を脱げと言われました。いよいよクライマックスになりました。入れ墨の囚人番号は、絆創膏で隠してありました。右の前腕が見えないようにして、ドイツ語で話し始め、自分が普通のユダヤ人であることを強調しました。……」⁽⁷⁶⁾ゲシュタポが、絆創膏で隠された入れ墨の囚人番号を見つけることはなかった。

後年、モルドヴィッツは、逮捕の日もセレヅに連行された日も、正確に言うことはできなかった。ただし、当時プラチスラバで多くのユダヤ人が逮捕されたことは、記憶していた。とは言っても覚えていたのは、プラチスラバで大規模にユダヤ人が襲撃されたのが、9月末のことであったということぐらいではないかと思われる⁽⁷⁷⁾。[こうしてモルドヴィッツはアウシュヴィッツに移送されることになったが、移送列車に乗る前に収監された]収容所で、彼はユダヤ人にたいして「誰であろうと、ここから先はアウシュヴィッツへの片道の旅だ。」⁽⁷⁸⁾と言った。モルドヴィッツの苦しみは、移送列車の中でも続いた。「また独りぼっちになってしまいました。私は列車に乗せられましたが、それがどこに向って走っているのか、よくは分かりませんでした。[ウィーン南にある]ウィーナー・ノイシュタットに行くと言われました。蜂起が終わった1944年10月のことでした。

(76) Ibid, p. 16.

(77) このユダヤ人への襲撃があったのは、1944年9月28日から29日にかけての夜間のことである。より詳しくは、Hlavinka, Ján and Eduard Nižňanský. *Pracovní a koncentračný tábor v Seredi 1941-1945.* (Labour and concentration camp in Sered 1941-1945.) Bratislava: Dokumentačné stredisko holokaustu, (Holocaust Documentation Centre,) 2009, pp. 105-106を参照。

(78) YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, pp. 18-19.

そのときは、身も心も、そして道徳的にもすっかり参ってしまいました。万事休すの状態でした。それでも、移送列車の中では最後の力を振り絞り、『ドイツ人の言う移送先を信じてはいけない、自分たちは死に行くのだ。』と警告しました。しかし、皆は私を非難して、殴りつけました。我が人民がそうしたのです。……『みんな死に行くんだ、自分を大切にしろ、私は喜んでみんなのために道を拓く。』と、何回も言いました。彼らは私を殴りました。蹴りました。私は意識不明のまま、横たわりました。どうしても、できませんでした。』⁽⁷⁹⁾選別が行われるアウシュヴィッツのランプ [降車場] に到着したなら、親衛隊員に駆け寄りピストルを奪い、まず親衛隊員を射殺し、それからその銃で死のう、とモルドヴィッツは決心した。しかし、幸運なことに、グローフノ出身のポーランド人のある収容者⁽⁸⁰⁾がランプで彼に気づき、^{かくま}匿ってくれた。そして、親衛隊に分からないように、新たな囚人番号を入れ墨してくれた。そのときのモルドヴィッツの気持ちを一番よく表しているのは、次の言葉である。「入れ墨は痛かったのですが、肉体的な苦痛は精神的な苦痛に比べれば、まだましでした。自分の命はどうなっても構わないと思っていました。それでも、心の傷はどうしようもできませんでした。それは命を奪われるよりも悪い。私にとってひどい精神的打撃で、どうしたらいいのか分かりませんでした。友人の声かけがなかったら、ランプで殺されたほうが、よほど良かったと思ったことでしょう。』⁽⁸¹⁾

モルドヴィッツのポーランド人の友人たち

(79) Ibid, p. 19.

(80) 証言のとき、モルドヴィッツはこの人の名前を覚えていなかった。

(81) YVA, P 25/13. Interview with C. Mordovicz, p. 21.

は、スロバキアのユダヤ人 60 人と一緒に、彼をシレジアにあるフリードラント労働収容所〔プラハの北東約 130^{キロ}、オシフィエンチム（アウシュヴィッツ）の北西約 350^{キロ}〕に移送することに成功した。モルドヴィッツはそのシューベルト工場で働き、解放されるまでそこに収容された。

ロジンへのブラチスラバでの支援には、スロバキア人の学友で、ブラチスラバで憲兵隊に勤務していた前述のヨゼフ・オンドリアーシュが大いに力を発揮した。ロジンの証言によると、アウシュヴィッツを脱走した後、偶然にもブラチスラバでオンドリアーシュに出会った。オンドリアーシュは、ロジンが市電から降りるときに気づいて、「ちょっと待てよ、どういうわけでユダヤ人みたいに走っているんだ。」と声を掛けたのである。当時、ロジンはヴルバと一緒にブラチスラバのマティチナ通りの下宿屋に住んでいた⁽⁸²⁾。しばらくして、オンドリアーシュは、空室になっていた 3 号室に引っ越してきた。そのときはまだ、彼はロジンがアウシュヴィッツから脱走してきたことを知らなかった。ロジンは戦後の証言で、「オンドリアーシュには、シュテファン・ロハーチという名の偽造身分証明書⁽⁸³⁾を使ってハンガリーから帰国したと言いました。そのような生活をしたのは、私だけではありませんでしたから。オンドリアーシュは私以外にもさらに何人かのユダヤ人を^{かくま}隠^{かくま}ってしていました。』⁽⁸⁴⁾と語っている。

ロジンは、オンドリアーシュの人柄を次のように語っている。「彼は私の親友であり、信頼できる人でした。彼は私が迷惑であるというようなことは、おくびにも出しませんで

した。蜂起が始まってからは⁽⁸⁵⁾、私たちはドアに、警部ヨゼフ・オンドリアーシュという表札が架かった、もう少し大きなアパートに引っ越しました。彼が危ない橋を渡っていることに気づいたことは、しばしばあります。』⁽⁸⁶⁾。このような次第で、ロジンのほうは、モルドヴィッツよりも安全であった。警察やフリンカ兵が警官のアパートを捜索することは、まったくありえないからである。とうとうロジンはオンドリアーシュに、強制収容所から脱走してきたことを告げた。ロジンの証言記録は、長い年月を経た後でも、〔脚色されることなく〕極めてシンプルである。とは言え、蜂起が鎮圧されたからには、情報が漏洩してしまえば、強制収容所から脱走したユダヤ人のロジンだけでなく、その「助っ人」になったスロバキア人の命も危険に晒されることになってしまう。

随分と年月が経ってから、ロジンはオンドリアーシュに告白したときのことを、次のように証言している。「ヨジュコ、ほくは逃亡者だが、どこから脱走したか、君は知らないだろう [と言うと]、彼は、どうしてそういうことを言うのかと訝^{いぶか}しげでした。ほくはアウシュヴィッツの強制収容所から脱走したんだ。ほくの前腕にある数字は収容者の登録番号だ。その意味が分かるか。二人が見つければ、有無を言わずに君と僕は射殺されてしまう [と言いました]。すると、彼（オンドリアーシュ —— ニジニャンスキー）は、心配するな、上等だ、ほくの見える所にいる限り、絶対に心配するな、と言いました。』⁽⁸⁷⁾

(82) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, p. 26.

(83) アーリア人証明書と呼ばれるこれらの文書（スロバキア人クリスチャンであることを証明する文書）は、ユダヤ人コミュニティの代表者から脱走した 4 人全員に提供された。

(84) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, p. 26.

(85) スロバキア国民蜂起（1944 年 8 月～10 月）のこと。〔親独ドイツ政権の打倒を目的としたレジスタンスによる反独蜂起。ドイツ軍によって鎮圧された。〕

(86) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, p. 26.

(87) YVA, P 25/13. Interview with A. Rosin, pp. 26-27.

オンドリアーシュは、事態の深刻さを認識しながらも、ロジンを助け続けた。その後も、ブラチスラバでフリンカ兵が見知らぬユダヤ人を逮捕するのを二人は一緒に目撃している。ロジンの証言によると、1944年から45年にかけての冬に、オンドリアーシュは、生活のためとか旅行のためとかに必要な各種証明書の取得の手助けをした。それだけでなく、モルドヴィッツ、ヴルバ、ヴェツラーとも知り合いになった。彼らは「俺たち」の家と言って[オンドリアーシュのアパートに]何度も泊まっていった。オンドリアーシュは、脱走者を通報するようなことはしなかった。ロジンがシュテファン・ロハーチの名前で就職できるようにさえしてくれた。しかし、ロジンの救出譚は悲劇的な結末を迎えることになった。1945年4月、前線がブラチスラバに近づいて、赤軍とナチスの軍隊との最後の戦闘が始まった。ロジンの証言によると、そのときオンドリアーシュは、さらに4人の元収容者(脱走者)を助けていたという。彼らの家の近くで戦闘があり、ソ連兵が負傷した。ロジンに結末を語ってもらうことにしよう。「私はオンドリアーシュと一緒に表に出て、彼(ソ連兵——ニジニャンスキー)を私たちの部屋に連れてきました。私たちは彼を手当てしてから、また外に出ようと思いました。そのとき、この負傷したロシア人は、水をくれと訴えました。私は水を汲みに行こうとしましたが、ソ連兵の一人が、出るな、撃たれるぞ

と言いました。ヨジュコは、怖くはないさと言って、出ました。そして、玄関から足を踏み出した瞬間に3発の銃弾を浴びました。即死でした。私は[玄関のほうへと]降りましたが、どうすることもできませんでした。すぐに思ったのは、彼ではなく私が撃たればよかったのに、ということです。』⁽⁸⁸⁾ こうしてオンドリアーシュは、ユダヤ人の同胞を助けながら死んでいったスロバキア人の一人となったのである⁽⁸⁹⁾。

ロジンとモルドヴィッツの勇敢な脱走は、英雄的行為であった。それによって、1944年にはすでに、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所でのユダヤ人殺害にかんするさらなる情報を得ることができるようになった。それは、ヴェツラーとヴルバによる、それ以前の報告文書を補完するとともに、事実を確認するものでもあった。しかし、連合国はこの報告文書を活用して、ナチス・ドイツに強い圧力をかけ大量殺戮を止めさせるができなかった。さらにまた、これらの報告文書は、進行中であったハンガリーからのユダヤ人の強制移送を中止することもできなかった⁽⁹⁰⁾。それは脱走した人たちの責任ではない。そのような計画を実行するのは、誰か他の人であったはずである。彼らの信頼すべき報告文書は、あの時代の重要な歴史文書の申し分ない一つの例であり、ホロコースト、とりわけアウシュヴィッツ強制収容所におけるユダヤ人の殺戮を疑問視する修正主義的潮流の誤りを正すものである⁽⁹¹⁾。

(88) Ibid, p. 28.

(89) より詳しくは、以下を参照。Nižňanský, Eduard.

Židia a Slováci - šľachetnosť a pomoc v čase holokaustu. (Jews and Slovaks - generosity and help during the Holocaust.) In *Park ušľachtilých duší 4*. (Park of Noble Souls 4.) Bratislava: IOK, 2010, pp. 52-54; Snopko, Ladislav and Miloš Žiak. Pomocník. Záchranca. (Helper. Rescuer.) In *Park ušľachtilých duší 2*. (Park of Noble Souls 2.) Bratislava: IOK, 2008, pp. 12-25.

(90) Gaško, Mikuláš. *Nad úkrytom*. (Above the shelter.) Bratislava: SAK, 2014.

(91) この研究の抄録は、*Slovensko a nacistické koncentračné tábory*. (Slovakia and the Nazi concentration camps.) Bratislava: Stimul, 2015, pp. 118-132 に収録されている。

文書館

Slovenský národný archív (SNA) [Slovak National Archives]
Yad Vashem Archive (YVA)

定期刊行物

Slovák (The Slovak)
Slovenská politika (Slovak politics)

参考文献

- Czech, Danuta. *Kalendarium der Ereignisse im Konzentrationslager Auschwitz-Birkenau 1939-1945*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Verlag, 1989.
- Gaško, Mikuláš. *The Trains of Death. Memories of an Attorney*. Bratislava: SAK, 2014.
- Hlavinka, Ján and Eduard Nižnanský. *Pracovný a koncentračný tábor v Seredi 1941-1945*. (Labour and concentration camp in Sered 1941-1945.) Bratislava: DSH, 2009.
- Hradská, Katarína (ed.). *Holokaust na Slovensku 3. Listy Gisely Fleischmannovej (1942-1944). Dokumenty*. (Holocaust in Slovakia 3. Letters of Gisela Fleischmann (1942-1944). Documents.) Bratislava: NMŠ, 2003.
- Hradská, Katarína. *Holokaust na Slovensku 8. Ústredňa Židov. Dokumenty*. (Holocaust in Slovakia 8. Jews Centre. Documents.) Bratislava: DSH, 2009.
- Kamenec, Ivan. *On the Trail of Tragedy. The Holocaust in Slovakia*. Bratislava: H & H, 2007.
- Kamenec, Ivan. Phenomenon of the holocaust in historiography, art and in the consciousness of Slovak society. In Vrzgulová, Monika and Daniela Richterová (eds.). *Holocaust as a historical and moral problem of the past and the present*. Bratislava: DSH, 2008, pp. 331-339.
- Kamenec, Ivan, Vilém Prečan and Stanislav Škorvánek. (eds.) *Vatikán a Slovenská republika (1939-1945). Dokumenty*. (The Vatican and the Slovak Republic (1939-1945). Documents.) Bratislava: SAP, 1992.
- Kárný, Miroslav. Osudy jedné zprávy. (The fate of a report.) In Wetzler, Alfréd. *Čo Dante nevidel*. (What Dante didn't see.) Bratislava: Milanium 2009, pp. 312-321.
- Kárný, Miroslav. Historie osvětimské zprávy Wetzlera a Vrba. (The history of the Auschwitz report by Wetzler and Vrba.) In Tóth, Dezider (ed.). *Tragédia slovenských Židov*. (The tragedy of the Slovak Jews.) Banská Bystrica: Datei, 1992, pp. 167-186.
- Kladivová, Vlasta. Osudy židovských transportu ze Slovenska v Osvětimi. (The fate of the Jewish transports from Slovakia to Auschwitz.) In Tóth, Dezider (ed.). *Tragédia slovenských Židov*. (The tragedy of Slovak Jews.) Banská Bystrica: Datei, 1992, pp. 139-166.
- Lang, Tomáš and Sándor Sterba. *Holokaust na južnom Slovensku na pozadí histórie novozámockých židov*. (Holocaust in southern Slovakia against the background of the history of the Jews of New Zamosc.) Bratislava: Kalligram, 2006.
- Lánik, Jožko. *Oświęcim. Hrobka štyroch miliónov ľudí*. (Oświęcim. The tomb of four million people.)

- Bratislava (b. r.).
- Lipscher, Ladislav. *Die Juden im Slowakischen Staat: 1939-1945*. München: Oldenbourg, 1980.
- Němeček, Jan. Československý londýnský politický exil a židovská otázka. (Czechoslovak London Political Exile and the Jewish Question.) In *Terezínske studie a dokumenty 2002*. (Terezín Studies and Documents 2002.) Praha: Institut terezínské iniciativy, (Institute of Terezín Initiative) 2002, pp. 324-340.
- Neumann, Oskar. *Im Schatten des Todes*. Tel Aviv: Olamenu, 1956.
- Nižňanský, Eduard. Antisemitská propaganda a deportácie na Slovensku v roku 1942. (Anti-Semitic propaganda and deportations in Slovakia in 1942.) In *Antisemitizmus a propaganda*. (Antisemitism and propaganda.) Bratislava: STIMUL, 2014, pp. 125-159.
- Nižňanský, Eduard. Holocaust in der Slowakei. In *Unterrichtsbeispiele zu den Verbrechen im Nationalsozialismus*. Berlin: Cultus e. V., 2005, pp. 7-17.
- Nižňanský, Eduard (ed.). *Holokaust na Slovensku 6. Deportácie v roku 1942*. (Holocaust in Slovakia 6. Deportations in 1942.) Zvolen: Klemo, Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec, 2005.
- Nižňanský, Eduard. (ed.) *Holokaust na Slovensku 4. Dokumenty nemeckej proveniencie (1939-1945)*. (Holocaust in Slovakia 4. Documents of German provenance (1939-1945).) Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec, 2003. (Milan Šimečka Foundation, Jewish Religious Community, 2003.)
- Nižňanský, Eduard. Jews and Slovaks - Generosity and Help during Holocaust time. In *Park of generous souls 4*. Bratislava: IOK, 2010, pp. 44-70.
- Nižňanský, Eduard and Ivan Kamenec (eds.). *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke (1939-1945). Dokumenty*. (Holocaust in Slovakia 2. The President, the Government, the Slovak Parliament and the State Council on the Jewish Question (1939-1945). Documents.) Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec, 2003.
- Nižňanský, Eduard and Ivan Kamenec. Poplatky za deportovaných slovenských Židov. (Fees for deported Slovak Jews.) In *Historický časopis*, (Historical Magazine,) Vol. 51, 2003, No. 2, pp. 311-342.
- Nižňanský, Eduard and Michala Lônčíková. *Slovensko a nacistické koncentračné tábory*. (Slovakia and the Nazi concentration camps.) Bratislava: Stimul, 2015.
- Salner, Peter. *Prežili holokaust*. (Holocaust survivors.) Bratislava: Veda, 1997.
- Sobański, Tomasz. *Úteky z Osvienčimu*. (Escapes from Auschwitz.) Bratislava: Pravda, 1982.
- Sofsky, Wolfgang. *Die Ordnung des Terrors: das Konzentrationslager*. Frankfurt a. M.: S. Fischer Verlag GmbH, 2001.
- Snopko, Ladislav and Miloš Žiak. Helper. Rescuer. In *Park of generous Souls 2*. Bratislava: IOK, 2009, pp. 12-25.
- Setkeiwicz, Piotr. Słowacy i Żydzi w KL Auschwitz. (Slovaks and Jews in the KL Auschwitz.) In Nižňanský, Eduard and Michala Lônčíková. (eds.) *Slovensko a nacistické koncentračné tábory*. (Slovakia and the Nazi concentration camps.) Bratislava: Stimul, 2015, pp. 133-161.
- Świebicki, Henryk. Auschwitz - czy w czasie wojny świat znalazł prawdę o obozie? (Auschwitz - did the world know the truth about the camp during the war?) In *Zeszyty oświęcimskie, Numer specjalny (IV)*, (Oświęcim Journal, Special issue (IV)). Oświęcim: Wydawnictwo państwowego muzea, 1991, pp. 5-76.

- Szabó, Zoltán Tibori. “The Auschwitz Reports: Who Got Them, and When?” In Braham Randolph L. and William van den Heuvel. *The Auschwitz Reports and the Holocaust in Hungary*. New York: Columbia University Press, 2011.
- Szenes, Sándor and Frank Baron. *Von Ungarn nach Auschwitz. Die verschwiegene Warnung*. Münster: Westfälisches Dampfboot, 1994.
- Vrba, Rudolf. *I Cannot Forgive*. Vancouver: Recent College Publishing, 1997.
- Vrba, Rudolf. *Utekl jsem z Osvětimi*. (I escaped from Auschwitz.) Praha: Sefer, 2007.
- Vrzgulová, Monika. Každodenný život židovských vězňov v nacistických koncentračných táboroch. (Daily life of Jewish prisoners in Nazi concentration camps.) In Nižňanský, Eduard (ed.). *Z dejín holokaustu a jeho popieraní*. (From the history of the Holocaust and its denial.) Bratislava: Stimul, 2007, pp. 89-104.
- Wetzler, Alfréd. *Čo Dante nevidel. So správou Wetzlera a Vrba*. (What Dante didn't see. With the message of Wetzler and Vrba.) Bratislava: Milanium, 2009.
- Zaborowski, Jan. Bojové pole: Osvienčim. (Battlefield: Auschwitz). In Sobański, Tomasz. *Úteky z Osvienčimu*. (Escapes from Auschwitz.) Bratislava: Pravda, 1982, p. 30-31.
- Zavacká, Katarína. Protižidovské zákonodárstvo slovenského štátu. (Anti-Jewish legislation of the Slovak state.) In Tóth, Dezider (ed.). *Tragédia slovenských Židov*. (The tragedy of Slovak Jews.) Banská Bystrica: Datei, 1992, pp. 59-76.